戦前台湾における本島人信者の信仰形態②

香川大学大学教育基盤センター
非常勤講師
山西　弘朗 *Hiroaki Yamanishi*

本島人信者と「丹水」

前回（７月号）は、本島人信者の信仰形態について現地で「丹水（タンツイ）（台湾語）」と呼ばれる神前に供えた「神水」を持ち帰り、飲むことで腹痛が治まる、傷口に湿布することで傷口が治ると信じられていたことについて言及した。さらに布教師たちが病人のおたすけに行くときにも、おさづけの取り次ぎとともに、この「丹水」を飲ませていたようである。このように「丹水」は本島人にとって信仰実践に大きな役割を果たしていた。

本島人信者と「おさづけ」

本島人信者の入信動機のほとんどが病気であったと考えられる。当時、医療制度が十分整っておらず、さらに地方であれば医療機関へアクセスすることも難しい状況では、天理教の布教師がおたすけとして、病人に「おさづけ」を取り次ぐことで、病気を治し、信者が増えていくことは十分想像できることであろう。

天理教のおさづけは、言語的コミュニケーションを必要とせず、経験的に神の力を顕示するツールとなる。実際に、当時内地から渡った布教師が台湾語などの現地の言語習得がままならない中でも現地人布教に邁進できたのは、おさづけの取り次ぎによってである。

このように、おさづけという病気治しの儀礼が広く受け入れられる文化的素地があるかどうかということが、おさづけによる布教がスムーズに展開されるかどうかということに関わっている。そこで、台湾における呪術的な病気治しの儀礼について考察したい。

台湾における「収驚」

台湾では現在でも「収驚（シユウキヤー）（台湾語）」と呼ばれる儀礼がさまざまな宗教施設で行われている。この儀式は道教か仏教かを問わず行われており、たとえば台北市の観光スポットとしても有名な行天宮でも線香を用いて数分で受けられる。

「収驚」とは、もともと道教の儀礼である。台湾の文化人類学者である張珣はこの「収驚」の儀礼を受ける対象になる「著驚（ティウキヤー）」（驚かされる）という症状について次のように述べている。

> 「著驚」は中国の「文化症候群」の１つであり、西洋医学では神経症（ノイローゼ）と判断される症状であろう。さらに中国で私たちは人間関係の問題が病人の身体に現れるとも文化的に考えられる。病気の原因の解釈は、大部分は超自然の神鬼に帰すものや、掟を破ったことなどとされ、治療の方法としては魂を再び戻したり、鬼を駆除するなどの手続きを行うことになる。（張 1996：429 頁）

さらに張は、西洋医学と比較して、このような症状の文化的意義を以下のように説明をしている。

> 西洋文化では「ショック性神経症」と判断される「著驚」という病気は、中国では多くの文化的意義を有している。病人がおかれた社会的状況も含め、通常そうした状況の移行期にある人や、社会的適応が十分にできていない人、また神経系統が発育中である小児などが心身の不安定な状態を呈し、これが「著驚」を引き起こす。中国文化では「魂と身体は生後百日後にしっかり結合する」、「魂は過度に驚くと肉体から離れる」という考え方があり、また宗教的職能者は神仏の力によって鬼（悪霊）を退治できるとも考えられているので、これらに対応する「収驚」という治療がある。（張 1996：448 頁）

つまり、中国文化の中で「著驚」という病態や「収驚」と呼ばれる儀礼は、霊魂と身体に関する観念と強く結びついており、身体と霊魂が安定的に結びついていない状態の成人や神経システムが未熟な小児がこの病状になるとする文化的背景がある。では、実際に「収驚」という儀礼は霊魂と身体のどのような観念に基づくものであるのだろうか。張は、「収驚」の儀礼プロセスについて次のように説明している。

（１）「人間」は肉体と肉体の中にある数個の霊魂（魂と魄）が結合したものである。正常の状態であれば健全な精神生活を営むことができ、道徳的生活や社会的生活において「人」は肉体と霊魂が調和している状態の中で生活する。

（２）この肉体と霊魂は容易に離れさせられ、両者は分離されうる状態にある。

（３）霊魂と肉体が離れるさまざまな可能性の１つとして、霊魂が外部のものに驚かされ、身体から離れてしまうことがある。

（４）驚かされて外に飛び出した霊魂は自ら戻ることができないので、別の外部の力によって肉体の中に入れ戻されることを待たなければいけない。

（５）再び肉体と霊魂が結合され、もとの「人間」に戻る。（張 1993：208 頁）

このような中国文化における身体と霊魂の観念が「収驚」という儀礼の文化的背景にある。そして、病気の原因が身体における肉体と霊魂との不調であると考えることで、宗教的職能者による病気治しを必要とするのである。

ここで、筆者の体験を紹介したい。筆者が台湾東部の花蓮に旅行していた際に、現地で仏教の修行を受けたという男性と知り合った。その男性は、専門的な僧侶ではなく在家の信者で、短期間の仏教の修行にいくつか参加したことがあると教えてくれた。そこで、筆者は自分が天理教信者であることを話して、天理教には「さづけ」という病気を治す儀礼があり、自分はその儀礼をすることができると述べた。すると、その日の夜に突然、その男性に紹介された女性が赤ん坊を連れて宿泊先に現れた。事情を聞くと、ここ数日、赤ん坊が夜に何かに驚いたような表情で泣き出し、泣き止まなくなるという。そこで、「収驚」のような病気を治す儀礼をしてほしいとのことだった。筆者がおさづけを取り次ぐと赤ん坊はいくらか落ち着いたようで、その母親は喜んで帰っていった。

このように、台湾では現在でも宗教的な儀礼によって病気を治すということが一般的に受け入れられている。そして、その背景には道教か仏教を問わず、漢人の民間信仰として広まっている「収驚」という儀礼、身体と霊魂についての観念などがある。このことは、天理教が異文化社会である台湾において現地人信者を獲得する大きな要因となったのである。

［参考文献］
張珣（1993）「台灣漢人收驚儀式與魂魄觀」黃應貴（編）『人觀、意義與社會』207-231 頁，台北：中央研究院民族學研究所。
張珣（1996）「道教與民間醫療文化―以著驚症候群為例」李豐楙・朱榮貴（編）『儀式、廟會與社區―道教、民間信仰與民間文化』427-457 頁，台北：中央研究院文哲所籌備處。